

もえらしむ、

右の圖略ある女官服章といふ書の奥書に、寶曆十三年癸未五月廿七日平貞丈とありて、或
縉紳家の御本を寫されたるよし也、書中の事どもは室町殿比といふ、貞丈先生の註釋あり、さ
れば、かの寶髻の形狀の一證とすべし、

○按ズルニ、寶髻ノ事ハ、器用部容飾具篇ニ在リ、參看スベシ、

〔歷世女装考三〕兵庫といふ髮の風

今俗にいふ兒髻ちごまげ又は唐子髻からこともいふを、上古はひさごひさごはなといひ、中昔にはあげまきといへる
は、皆男の兒の髮の結風の名なり、女の兒の目ざし、ふりわけ髮、うなるはなりなどいふは、髮の毛
のさまにて結ぶりの名にはあらざる事勿論なり、されば前にいへる寶髻を女の髮の髻の名の
起立とすべし、次に筋髻すぢまげ次に唐輪からわの名ありしこと前に云へり、さて慶長の末寛永の比にいたり、
唐輪一變して兵庫といふ髻の名あり、狀は圖をみてえるべし、此髻は攝津國兵庫の遊女より結
ひはじめたる髻なり、寛永八年板の俳書、犬子集前句兵庫の者よたゞごめん附句なれ、けがをし
てゆく女房の髮の曲又慶安元年板峯續集前句正信前句姫にほし聞ば兵庫よ泊り船附句名に結びたる
青柳の髮、又婦人養草貞享三年板、儒者藤井瀨齋翁作、卷一、當時貞享二年いひけるか髮のゆひやうの名を島田兵庫など
いふは遊女の在る所の名をかりていふなりとぞとあり、此兵庫髻、寛永の比ひより盛にして、お
よそ六十年ばかりの間、都鄙も中人以下の女はみなゆひたる髻なれば、其事の書見いと多し、
抄録にはとゞめあれど、うるさければ不引けだし、吉原大空といふ書に、明和五年板、卷の三、元葭原の比兵
庫屋といふ遊女屋より起りたる髮の風とあるは、兵庫の遊女屋妓をつれて、江戸へ下りて妓樓
をひらきたる比、其妓の髮の風、它の妓にもうつりしならん、さて此結ひ風、元祿にいたりては、島
田勝山の二風にべされて、稍々すたれしとみえて、元祿八年板大坂人俳諧師伊原西鶴が作、俗つ